

《巻頭言》

社会情報教育研究センター開設 10 周年に寄せて

立教大学社会情報教育研究センター (Center for Statistics and Information: CSI) は、2010 年 3 月に、「調査・情報・統計技法の活用による研究活動の高度化への寄与」および「学部学生・大学院学生に対する研究基礎能力の涵養」を目的とする学内の教育研究支援組織として設置され、2020 年 3 月に開設 10 周年の節目を迎えました。この間、社会調査部会、政府統計部会、統計教育部会の 3 部会体制で、社会調査士・専門社会調査士および統計検定・統計調査士等の資格取得支援、社会調査法、政府統計の二次利用および統計分析法に関する教育支援コンテンツの開発や学部科目・全学共通カリキュラムへの協力、コンサルティング業務、外部講師を招いてのセミナーや研究会の開催、社会調査データアーカイブ (RUDA) の運営など、多彩な事業を展開してきました。さらに、国内外との対外連携事業にも積極的に取り組み、内外にその存在感を高めてきています。

近年、データサイエンス教育の必要性が広く認知されるようになる一方で、一部の政府統計の信頼性が社会問題化するなど、調査・統計への社会的関心が高まりつつあります。そのため、大学における調査・統計に関する基礎教育の重要性もあらためて認識されてきているところです。また、欧米ではすでに確立しているデータインフラとしてのデータアーカイブの構築・整備も、ようやく日本でその必要性が認識されはじめてきています。

もともと CSI 設立の出発点となったのは、欧米では確立している社会調査・統計関係の教育研究支援組織が、日本ではほとんど見られないという認識からでした。この 10 年間に国内の他大学でも少しずつ、このような組織の必要性が認識され、設立される例が見受けられるようになりました。その背景には、情報技術革命の進展にともない、大量の情報を収集・分析できるようになり、調査技法・統計技法を適切に評価し、運用する能力がますます求められるようになったことが挙げられます。

こうしたなかで、本号では、CSI の運営に深くかかわってきた教員が集まり、CSI の 10 年をふりかえり、その意義をあらためて確認し、今後を展望し課題を語り合う座談会を掲載しました。これをひとつの節目として、今後も、CSI の意義が広く理解され、その機能が十分に発揮されることを願ってやみません。

松本 康